

ベルリンでの出会い

フランクフルト補習授業校 中学三年 小林 周平

僕はドイツのフランクフルトに住む中学三年生。月曜日から金曜日は、ドイツ校に通い、土曜日に日本人補習校に通っている。

八月の下旬、ドイツ校の修学旅行のためにクラスでベルリンに行った。中央駅のそばのホテルに泊まり、数日間ベルリンを見学した。

旅行最終日の前日、ロビーでホテルの人が僕に、日本語が話せるかどうかを聞いてきた。ホテルの人によれば、隣でガイドブックを手にした日本人のおばあさんがドイツ語も英語も話せず、お困りになっていくという事だった。僕は、彼女にこう話しかけた。

「すみません、何か手伝いましょうか。」

チェックインしたばかりのそのおばあさんは、どこで朝食があるか、電気がつかないので、どうすればいいのかなどを聞きたかったそうだ。そのホテルは、部屋のカードを差し込まないと、電源が使えないので、それを説明してあげた。そして、短い挨拶を交して、別れた。

次の日、出発のため、朝食を素早く済ませた僕は、他のクラスメイトより早く待ち合わせ場所のロビーでくつろいでいた。すると、またあのおばあさんに出会った。今度は、ベルリンに在るらしい「森鷗外博物館」がどこにあるかを聞いてきた。さすがに僕はベルリンに住んでいるわけでもないし、そういう記念館がある事も知らなかった。住所を探し出しルートを教える事しかできなかった。そして、彼女は出発した。それほどたまたないうちに、僕は先生に、僕達の帰りの電車が何番線から発車するかを探すように、駅へ送り出された。掲示板を見て戻ろうとした時、まだあのおばあさんが探し物をされているようだった。彼女に話しかけた。おばあさんは森鷗外記念館には、電話をかけてからでないと日本語ガイドが付かないという事をご存じだったので、公衆電話をお探しになっていたそうだ。彼女はドイツの公衆電話に不慣れだとおっしゃったので、説明してあげた。そうしたら、彼女は自分の事を少し話してくださった。

「私は八十歳すぎていて十数回ドイツに来てはいるけれど、まったく慣れる事がないので、困っているんですよ。」

と、おっしゃった。

たった二回の出会いだったが、別れの時におばあさんは、安心されたように見えた。現在日本で入院中の祖母にどことなく似ているおばあさんに出会い、祖母と話した気分になることができ、少しうれしかった。

すみませんという一言をきっかけに、困っているおばあさんの役に立つ事ができた。僕はその後、先生に電車の出発ホームを報告しに行った。そして、ベルリンを後にした。

車窓を開けると、ガタンゴトンという音とともに、気持ちよい風が車内に入ってきた。何も考えず、流れる景色を楽しんでいた僕の頭の中で急に、あのおばあさんとの会話が蘇った。僕が、

「それでは、お気をつけて。」と言ったら、おばあさんは、

「本当にどうも有り難うね。色々と助かったよ。あなたも、気をつけて帰ってね。」と、温かい言葉をくださった。

九年間、ドイツにいる僕は、初めて見知らぬ日本人と一人で話をした。初めは緊張したが、周りのドイツ語の会話の中での日本語は少しほんわかした、ここのよい感覚だった。